International Joint Workshop on Slow-to-Fast Earthquakes 2023
参加レポート

浜橋真理（山口大学・講師）

9 月 13 日から 15 日にかけて、東京大学伊藤国際ホールにて開催された国際研究集会：“International Joint Workshop on Slow-to-Fast Earthquakes 2023”に参加をさせていただきました。本研究集会では、1923 年関東大震災から今年で 100 年であることも記念し、3 つのトピック（1)Slow-to-Fast Earthquakes around Metropolitan Areas, 2)Connecting Geophysical and Geological Timescales of Slow and Fast Earthquakes, 3) Comparative Convergentlogy on Slow-to-Fast Earthquake Science）が掲げられ、3 日間にかけて参加者間でさまざまな研究成果を共有し合い、多くのディスカッションが繰り広げられました。

東京大学伊藤国際ホールの格式高い会場で、大スクリーンでの口頭発表と、3 日間の充実したポスター発表が行われました。様々な対象地域の地震・活構造について、そして様々な観測手法・調査手法について、新たに学ぶ機会であったとともに、複数の理学分野を横断して地震の研究に取り組む領域全体の姿勢には、とても良い刺激を受けました。

本研究集会では、多くの研究者の方と再会できた一方、今回初めてお話をする研究者の方々（学生さんを含め）も多く、このような大きなスコープの研究集会（普段の地質学会や地震学会とは異なり）ならではの醍醐味だと思いました。とくに研究集会 1 日目の夕方には、会場で懇親会が行われ、国内外の研究者の方々と交流することができました。

本研究集会では、私は関西地域の内陸地震を発生させる活構造に関して、大阪湾内の活断層調査（反射法地震探査）に関する研究発表（ポスター発表）を行いました。ポスターのコアタイムでは、ポスターの前で参加者の方々と様々な意見交換を行うことができ、今後の研究につながる新しい見方や異なる視点を得ることができました。

研究集会前日の 9 月 12 日には、東京大学地震研究所の会場で若手イベントに参加をさせていただきました。本イベントでは、若手研究者間でポスター発表を行ったり、お互いの研究や近況について交流できる機会がありました。また、本イベントの一環として、講師 2 名による基調講演をいただき、地震観測から探る比較沈み込み帯や地震発生帯構造、地質学から見たプレート境界深部の流体移動と岩石破壊について、貴重な講義を受けることができました。この若手イベントは、翌日からの研究集会に向けた良いキックオフと準備となりました。

本研究集会への参加は、私の今後の研究の大きな糧となりました。

＊本研究集会の運営をされた Slow-to-Fast 地震学の領域関係者の皆さま、事務局の皆さまには深く御礼を申し上げます。本研究集会の参加にあたり、旅費の支援をいただきましたことに感謝を申し上げます。

（上写真）東京大学伊藤国際ホールのポスター会場と懇親会の賑わいの様子